



無
59.5 × 67.0 cm
墨 和紙
2015
第227 回ル・サロン2017入選

禅

は、フランスで最も多くの人が接している仏教の宗派である。ヨーロッパにある禅寺や禅道場は大小300ほど。その約3分の2はフランスにあるのだ。禅(ZEN)という言葉も、すでにフランス語になった。日本語の「禅」よりも幅広い意味を持ち、「静かな」「落ち着いた」、あるいは英語の「COOL」と同じく「凄く」「格好良し」というニュアンスでも使われる。

そんなフランスで約350年前に生まれた世界最古の公募展が、ル・サロンだ。ルノワールやモネ、セザンヌ、ロダンなど名だたる芸術家たちも参加したこの展覧会に、初挑戦から5回連続で入選した日本人画家がいる。それが、福井県美浜町にある徳賞寺で住職を務める大雲道人。約50年間にわたって、主に達磨の絵を描き続けてきた禅画家である。

以前は日本画や水墨画を描いていた大雲だが、僧侶としての務めを果

たそうとすると、どうしても制作に費やす時間が取れなくなる。時間がないせいで、完成するまでに何度か中断をばさむと、元々思い描いていたような絵にはならない。そんなジレンマを抱えていた大雲は、ひと筆で一気に描ける墨の世界に入る決心をした。そこで辿り着いたモティーフが達磨。曹洞宗の禅僧である彼にあって、禅宗の開祖を描くことは、当然の帰結だったのかもしれない。曹洞宗では新任の住職が寺に入る際、「晋山式」という儀式が執り行われる。大雲の晋山式で彼に戒を授けたのは、後に永平寺七十七世貫主となった丹羽廉芳禅師。大雲の師である多田院大ともゆかりが深く、「あなたも日本一の達磨が描けるように」と、昭和天皇に書を教えた佐久間大雲に由来する「大雲道人」という画号を付けた。同じ頃、禅師は大雲が過去に描いた全ての作品に、自ら筆を執って賛を加えている。

禅画家

両忘

78.0 × 54.0 cm
墨 和紙
2017

第228 回ル・サロン2018入選

大雲道人

世界最古の公募展で認められた
達磨に込めた禅の精神。



大雲道人
画